

刊行にあたって

現代の小児歯科臨床から見えてくる一般歯科医療の構造変化

子どもを診続けてつくづく感じるのは、臨床の中心だった“う蝕”が急速に解決に向かってきたことです。いい換えれば、器質的疾患対応の医療が収束してきたことです。予防観念が定着してきた結果、う蝕で大きく歯を崩す人も少なくなってきましたし、歯周病もやはり少なくなってくるはずです。歯科医療の構造変化はもう既に子どもから始まっています。

新患の主訴は、予防と先天的な事由がそのほとんどです。器質的な対応が皆無になるわけではないでしょうが、不可避な内容、すなわち先天異常、外傷、そして予防という3つが残ることになるのでしょうか。要するに、人の意識では変えることのできない事象対応の医療に集約されてくるのは確実です。

現状の小児歯科臨床は、まさに10年、20年後の一般歯科医療像そのものだと思います。子どもの「口」からは未来が見えてきます。歯科全体の構造変化はまさに目の前に迫って来ているのです。

近頃、「小児歯科医療は成育の時代に入った」とよく耳にします。育むべきは口からの健康であり、そのころであるべきです。本増刊号にご執筆いただいた先生方には、小児歯科専門医たちが目指す「成育医療」と、近未来の一般歯科医療を思い描き、読者の皆様にお伝えいただきました。

子どもの「成育」を支援することこそ、私たち小児歯科医が担うべき役割とつくづく思うのです。本書が皆様の臨床の一助となれば幸いです。

2011年3月

編集委員代表 吉田昊哲

